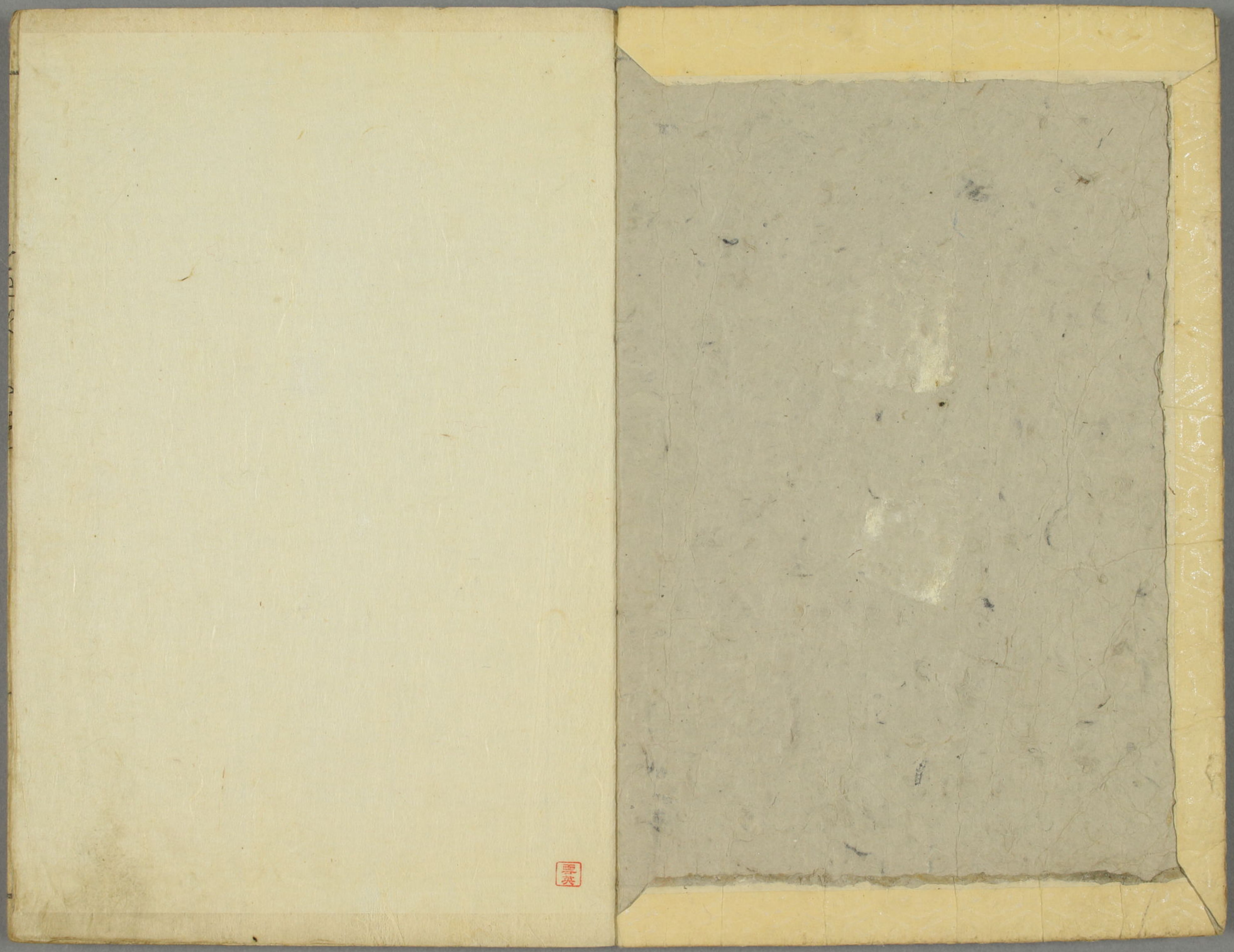
# 遷竟紙料



# 還魂紙料下之巻

江戸　柳亭種彦編

小汀民蔵書

## 一　七夕踊　小町どり　うけ踊

正保の比の画巻に七夕踊の圖を載て説書に「さても七月七夜天上に天の川とく深き廣き川なり一年にたゞ今宵ばかり牽牛織女の逢瀬あれば かさゞのゝ橋を渡して契をふかくかぐちとあり〜ものゝとうや乞巧奠とて人〻に今宵も七夕祭もてあそまめり〜まくに七ツ八ツ五ツなる小姫こち見〜く出る太鼓どんどんごとに拍子をとり〜ろく歌どうくつの踊まろくこゝに見る七夕とぞさもること昔今に変ぜとろ」とあり案に七夕踊とて別にあるにあらず小女の人集に盆を持ろ狐て七夕ゝうどる者の名あるべし「伊呂芝居」正徳年間印本に「貴の人の公も公道にて十八九をおうしろ　ゆんとのゝことにく男のすてのやうにそぐろ娘七夕のかけ踊に母の親愛たゞでにく紙子のすちまに光綾綸子の袴髪はわさまの辻に紙子織珍の長袴に緋ぢんむの下着と

わのめりせ毛琉乃巻に紫ちりめんのかく巻を袋に尻切とまりせ金の太鼓に塗
撥も長かいさる日傘に布袋をふくる簿繪の團乳母ぢるまへ古今かさ〻ぢ子と笹に
きて撥ひらさん尻に金入の帯をとげかく地黒に羽團の大摸擬の達人のかさびら十四五
ある少女郎に彼養ひぎ〻とおのまが身とめふがまてく汐のさかぢ下女に檜破竜中う
の拍子くせて少町踊の門にされば踊るも内へひりて我りの新に人の娘子とりてあを
とあ〻さ我主の子かそ〻に食さを喰ぬも知とあ茶酒きんにゆるぎ飯る」（享保十七年著 愚案問答 寛保二年印本に曰「七月七日七夕とある中略又仕百姓人
下略）五節句ふりの紅とあり
の子彼平さき太鼓をさき黄〻くけさひかざり出る太鼓をさき小あと篠ひ歩く
黄へ娘の子十四五より十七八までの羽あを盛あるを義〻〻く拵へいぞ〻せ焼鏝り
みる小女郎あん其身分限相應そまく〻に日傘あんさ〻かけさせ丸團に房あん分
〻るを拵せあるに黄〻き扇あどめてあふを面白く家をとうひ大内町方小路〻〻
友達のかく〻汐踊どうけ〻うむ〻〻り小町とのぞ人毎に義人のせうに色ひ名分て

少町踊といひ傳へり　其歌に

二條のるゝ場ふうづゝがふきをなとふけるぞ立ぎて出べ

関文のところに寛永の曲子証あり

今年ぢや〇〇〇〇〇さまたんぢよ。花の糸はなをほんぢよ

小家一ッこのやるふ太鼓の拍子あり

太鼓　テン。テン。テ　テ。テ。コ。テン。テ　此四ッハ從拍子あり　此四ッハ寄て拍子あり

かくの如くふ拍子を八ッおてゝ家をうゝひ出も家のうちに地拍子。個道と汐ふ太鼓の
お撥數を五ッうはあり。テン。テン。ヨスル。テテ。テン　是五拍子あり。偖又供の出立はあり少く
ゆて額ふ紅のえちまを紅とさせゝ裾とそ女の帯を二折ゆて左の肩ふゝ右の袋乃
ゆへ大撥ふむもび下〻り

布袋とるがいて
ゐてん團と
名付う

慕緊集 万治三年印本

錦雲のたなびき
めくまれ
そどもきうふ
常辰

雁鳥英波集 寛永十五年撰

前々 紅の法眼と若衆花をそどくせて
附々 文ふ漆 やるべ〜やまちまき 尚良
○そどりに帽子まちまきとたけくう

俳諧懐子 万治三年印本

そどりみやめくぶ出し 令布
○たまをくふとに画あるびあふ
いみところとてしめかせてゐんるべ

七月七日は牽牛織女天の川にて一夜契りをなしたまふ其縁をひきてむかしは娘の子どもを持る人は嫁入して取結ぶまでいつにも美しく形勢出させ何かと祝ひとよろこびうたひて踊らせけり」といへり 以上愚案問答 是等はさまで古き草紙にもあらねど古老の説によりて記しぬ みやこに昔をしのぶよすがとして前に摸しゝ古画を合せまた別に考を附するにおよばず愚案問答にいふ如く小町といふ小女の艶なるを讃るより出たる名にて此画則小町踊なるべし又 俳諧五節句 元禄元年印本 に「をどり太鼓踊は國々ゆく唱歌かずかずなり音頭のなき國あり大方夜をどる男女ともに踊又あるは女童部踊せしは簿の太鼓塗撥をもち毎にたたき深緋の鉢巻帯を肩よりぶらさげ結びたまへと名付けし程の大路を日傘さしかけて踊をなすに迄信きの門にて踊ありきしを小町をどりといふ」とあり帯を襷にかくる事愚案問答にても合せてしるべしむかしの女の帯は幅三寸 今の鯨にて二寸ほど 長六尺五寸 今のは七尺五六寸 と 一代女 ひとりまど むかし物語 等にしるせり前の古画に襷とせる紐はふりの幅三寸の帯なり又 續江戸砂子 享保元年印本 七月の條に「小町踊 十二三以下の小女。帯。腰帯やうのものを襟にかけ襷とし



團扇太鼓とて團のごとくなる太鼓にて拍子をとりて頌の踊にはあらず然ながら群集てあをぞゆくなり」といへり又 中古風俗志 明和元年江戸住老人筆記 に「昔は七月六日より小町踊といふ事ありて七八歳ばかりの女子紅縮の衿金入などにて鉢巻をさせ下髪頭に造花をかざしいろいろ美しき手襷をかけて達なる染ゆかたを着せ團扇太鼓に房のつけたるをもたせ四五人も召仕などの町人の娘は肩車にのせ乳母抱守なるは付きそひて日傘をさせそのかざり大勢娘子供をみを曳盆くばんは今日わきそだちありしたる姫の装なれといふ歌をうたひ歩行しが 柳亭曰延宝八年印本 俳諧江戸弁慶 に「九月居ぬかしたら山のあかれ菜 山夕」この句は七夕の秋の句なれど此小町をとりよくしるとよく思ひまはすべし 此小町のことは今に傳わる を見ればしる止で衣裳を改ておくる子供は暫二三人連て歩行とぞありし それ由来 まれ團扇太鼓並に鬼灯挑燈黒き箱挑燈に踊繪を火消など画るちやうちん裏はなくるも止し」といへりまた享保中まで小町踊の名は猶ありしからにてただ歌をうたひ太鼓の拍子をとるのみにて踊る事は絶しなるらん ちなみに奥村政信が繪本に小町をどりの圖あり 記するごとくやや髪に鉢巻して襷にかけさせたる 風俗志に 僞俳諧乃書にいは貞徳 くさのぼる小町 踊やんせをどり の發句をすこしめ小町踊のこと數多いへてめぼしうかねば抜出

せぞ考證とまぐき勺のくとめぐ

鷹筑波 寛永十五年撰

簿ごく乃踊まを壺扇うろ盆の月　一滴

前に摸〜出〜古画及冊子ぞ水圓扇を持もる夫コ人えさう其踊圓扇と太鼓

とを提ぐてなぶ水圓扇太鼓。とのの物を裏〜あるど

團扇太鼓の名前に引用せ〜

續江戸砂子 風俗志 等ふ水り

俳諧富士石 延宝七年印本

浸ぬ数かぜや淵べてうけ踊調和

壺扇太鼓とのふと古く此集に出延宝七年八百四十余年のむ〜ぞ 總て仕名のコ人えさう江戸ぞ葉〜

冊子あり此製江戸ぶ起る在今盆太鼓とのふの則圓扇太鼓あり

誰が家 元禄三年印本 其角撰

前句　青井

附句　泪橋

い後〜くの傘さ〜ぶ棚ぶそむく踊

再板ぞ水ぞ元と樂

五元集

ほの月踊かけうり日傘其角

えくも知りる俳諧集あまど日傘を用ひ〜証ぶ挟出ぞ。さて。あぶ引用せ〜草

紙ぶ見えるどく村ぶもあま町にもあま花処入りて躍るを踊をかるとひ掛られる

知よりスム方へ来く踊とうぞとのふ見へ少女のふわうぞ男子ぶも仕てあり 日次紀事

ふ見えぞ水ぞ年浪草ぶ或書ぶ曰「永禄十年七月駿河國ぶ風流の踊才あり法人見を

めてあそび八幡村ろ躍初村〜へとり踊を踊そまを又ふ込ぞ放ぶ後ぶ踊数多

とあの孫ぶあり八月末九月まて踊る」とのふとあり見うけ踊の名の見えさる初在

永禄八今文政より三百五十余年の昔あり。其角がかけとりの發句ぶ又云 或人の隨筆ぶ

月の月とのり〜八仕書ぶ況し〜如くかけの処つて九月を踊の初りとの意在

記を引て盆踊ハ古き事あるう〜を記せどの書ぶさる事見えぞ友人義成二

水記ぶく見出さうとく抜録とおとぞさう「永正十七年七月九二日見躍拍物今夜勸

修寺張行也當年毎夜有此支近年不見聞支也倚天下静謐之呼為欤云云

以上見二水記 薩戒記を引〜八仕様あるべ〜と云ぞ、永正十七年八今年まで三百五十一年

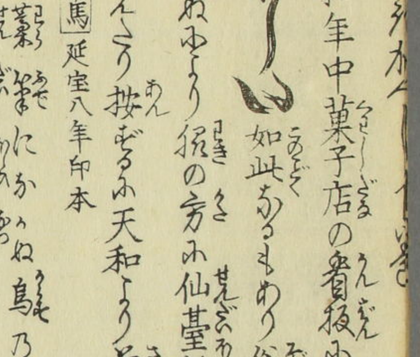
ふあるる盆踊ハ最ふるさ戯まあり 元和九年著 正保元年著 醒睡笑ぶ風流を他郷へ行るとあるも盆踊のとと

抜出せぞあるぞ 俳諧古道具ぶ

## 二　糟の番版

俳諧の書ぶ盆踊

我衣 古老聞書 曳尾庵藏ふ 天和年中菓子店の看板ふ仙堂糒と大阪流ふ書さう

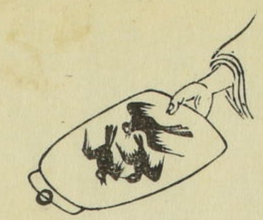


ゆしいと讀まそ如此なるもの俗ふの道明寺なり元禄の比より烏二三羽画き本字を失ひ後ねゆゑ狩の方ふ仙堂糒とのふ判を捺て重言ふホシイとも皆原と失ひ とのふと見えさう按ずるふ天和より前に比看板のことなり

江戸大坂通し馬 延宝八年印本

前々 菓子にかぬ鳥乃色染て 梅朝
附々 仏蓋 糒 夏 をきのくり 調和

延寶の比よりかの大師攝ふ書る看板と俗ハ烏とおりひしゝそ調和ハその俗説を見て烏とのふ勺ふ糒と附うふ看板五十年前までかまれくふ法ものしとそ



迦く蘭德齋ゞ画る法達の与作とのふ繪草紙ふ「[illegible]大尾なる尾とあれそ[illegible]」より[illegible]河のごんふあり熊野の牛王ふうりけるを[illegible]尾解[illegible]師屋ゆて道明寺のうぢんを取よせ荒大尾へ見せまゝせしゝそ我ふのりひかんぢんとまたもあふ人いりぐいふゝん[illegible]かくのまりくゝ」と出て上ふ摸しゝ圖あり當時まだ[illegible]れくも見和りゝ番板ふて烏を画きゝゝうり牛王のうちりとおりひよせうゞふとざまるふうるがど中むゝの洒落あるべゝ

## 二 酢の看版 三種

酢を賣ふ家の看板ふ三種あり其一種ハ瓶の形を板ふて彫たるあり 七十一番職人歌合の絵ふ酢賣の傍ふ瓶をもたゝるを見酢を貯る器あり其形うり出てあるべゝ

元禄元年印本 庭訓往來繪抄 元禄三年印本 倫訓蒙圖彙 ふ酢屋ふ今も[illegible]

看版あるべゝ

たるのありとそ今奥羽の街道又發州府中ふありと安芸牛を編るものと賣といへど賣と酢と通ゝう例の隠語ふく見も古紀ふりのゆうふ名なるれど比とを紀く草紙と見たぞ

發州ふて広義の看板と為八月祝ありと紙ふきく掛るゝ[illegible]

慶安四年印本 万聞書秘傳抄 ふ八月祝の名あり見祝と造の住者[illegible]

又一種ハ尼板ふく

ほゝゝ曲物多り見ハ俳諧の勺ふも見えくまべ其圖をわたるて摸しゝ出せり 高笑 序ふ 丙申

とあり享保元年紀

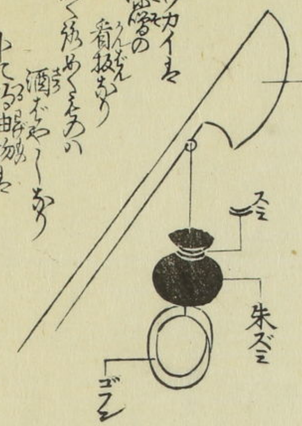
ゆのふ「酒屋の看板ふ矢箭と出もしゝ侯ごわまふ人のいるあうふとのことさ。そんふ祝屋のかんぢんにまるのうの底の母衣をもちどうぢや。わまふのんが射ても

素矢酢屋 又支考ぶ撰ゝ 本朝文鑑 享保二年印本 七の巻。九蛙ぶ醋德の頌ふ「さぢろりの徳わる醋の看板ふ節の底のぬけうをふりさげ又六ぶ門の帘ゆハ往来の人の津やひくらん

## 酢の看版乃圖

俳諧の書ハ見たるの圖のかきも徳とふ撰す

○寛文の比画る小屏風ハ左のごとくの圖ありて画人の賛ハ見えざると探幽の門人の筆ありとぞ

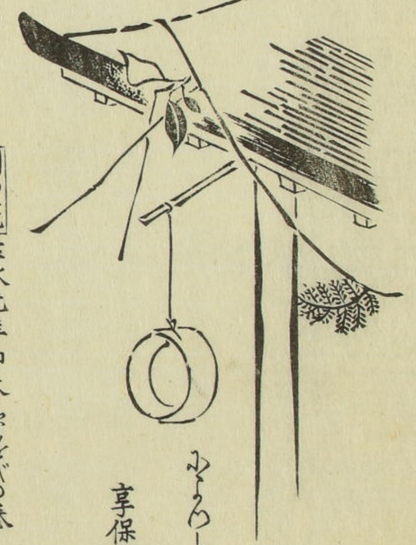



○セツカイ丸味噌の看板なり

ふく弦めくるあい酒おもしろしゝ

ひて彼曲物ハ

かの酢のえんぎんなり



國の花 室永元年印本 非松びの巻

すぎかきてを弥の看板と名付ル 支考

○ゝ名ハ漆の白ふ似ようてしめせく見べゝ

三足猿 室永二年印本 支考撰

前々 門松ハ光〳〵する付を濁をて 昌臼

附々 弥の看板を名ゝぬがちなり 水甫

○名ハ弥のこふかふ絵ハ仏かんでんのこゝを

さるがさるれど 本朝文鑑 國の花 と

かゝ撰者ゆてゝゝぬがちとのべ

童のこふハわざざゝふかゝ

ふるゝと歩る初日や濁る 弥看板 篶角

享保十七年印本 柾のかつら ふ仏國ゝ

○柾のうぼくハ千翁が歳且帳ゝり

篶角を不角が門人ゝるべゝ



○此圖享保十七年印本 俳諸舎之衆 ふゝり

仏書ハ鮭の粕ゝに

弱〳〵ゝる句集ゝて

弥ゝ〳〵かゝとのふ知に

あの看板と

絵かいてゝ

ゝかゝを画て

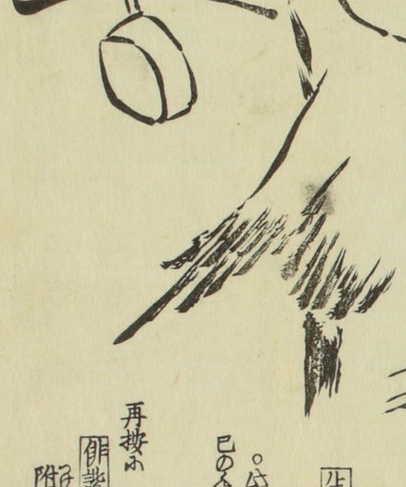
柴内ゝ

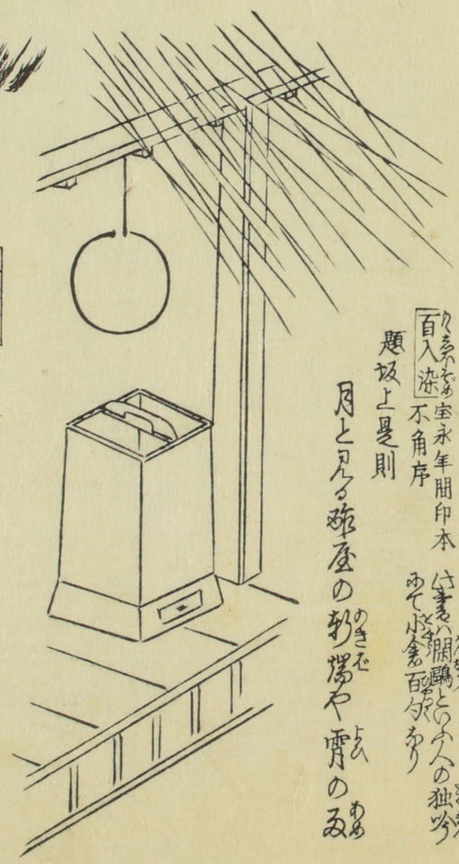
看板のこと

見えざれば

ゝに

載ず





百入途 室永年間印本 仏書ハ閑驢とのふ人の独吟 ゆて小倉百句ゝり

題坂上是則

月と見る弥屋の軒端や霄の面

生身魂

弥屋の軒を抜る氣を抜る蝶 巨洲

○仏書ハ俳諸の高黙集ゆてゝき書と見えず

巳のゝとのゝゆて年号ゝり〳〵或人寶暦十一年ゝるべゝとのり

再按ふ

俳諸世話盡 義應三年土佐國住皆庵撰 明暦二年印本一名世話焼草

附意拾遺の絵ふ「ゝゝ」ゝ。酢屋の印 とゝるを

仏看板のゝ絵義應ハ今ゝり

百七十年のむゝ〳〵なり

云」あゐ近く見えるゐ中古風俗志明和元年老人筆記ゐ曰「昔々酒屋の彩ゐ杉の樽ゆて毬のごくちゝらくる酒林といふ物あり尤九月おろ新酒のくだる時分ゆゑ田舎より
あらくて麦に麦ゐるそまを買てかけたるゝ〜近年まで本郷のすゑ四ッ谷
金ゐ多あまゝ〜ゞのまゝ絶てゐ〜又酢の看板ゐ多〜きを出〜かきゝ〜ゞまれも
いたゝ〜う止で古風を失ひ〜まゝ〜」とのゝ事を載るゐ前ゐ抜出せ〜生身
魂の時代とを合せ見れば寶暦の頃までいわゆる〜看板あるべくまゝど今ハ知る人
すくゐ醋ゐ眼に見えぐるき小虫の生とあり〜そまを濂ゝうとのゝ〜ゐ布節を
掛ゐ〜ゞのゝ輪ゐ〜ゞのゝ輪ゐ〜ゞまゝ遂ゐその輪をかくることも絶〜ゐゝん抜ゐ九畔ハ幾ほ
あり支考ハ笑覧さまゝ公貴殿ハ江戸のゝゐ限りとゐいわゞり〜ゞ化ゐゆゝ今も生存

【四】十筋右衛門

物を弄ゐ右衛門とゐ助語あり昔の諺ゐ十筋右衛門とのゝ〜髪毛ろいと
すくゐ紀とゆて右衛門ゆゝ紀の意もあくたゞ十筋ゞゞりとゐ狂のことあり

新續犬筑波集万治三年撰　抑髪　家之
西鶴大矢數延宝八年四月吟
前々　月も雲ぎんうのとゐや光〜〜ん　源八
附々　十筋右衛門が激ろ紀　正俊
阿蘭陀九二番船延宝八年印本　宗圓撰
難波種春藏書
前々　ぬけ紀ゐ多ゐ祇もめ　宜秋
附々　ゐれゆて公男ゐ十筋右衛門　髪ゐ

万治中の々ゐ見えるまゝ百六十余年前ゐ此諺ゐ〜とゐゝ〜西鶴一代女貞享三年印本
三の巻ゐ髪のまくゐきをゐ〜む女の泡ゐ「髪ゐ貞享四年印本ゐ「髪ゐ
おちて地髪ゐ十筋右衛門と恨めさゐ」に紀ゐまて云」。又咄大全年印本ゐ「髪ゐ
ある老人ゐそゐ紀ゐゐ紀ゐ子供大勢ゐきて十筋右衛門ゐ腹立〜おのれ十
一筋ゐ〜ゞゞゐ〜ゞゐゐとゐ」とあり咄大全ハ弓ぶ此紙料を彫る揚屋ゐ紀ゐ
抜ゆて菱川師宣江戸の狂ゐ」あり任合揃元禄年間印本ゐ「年の紀ゐ大十とすゞて七十に近き

白髪形の十筋右傷つ云」あやちく広河の月えくろ王徳中の印本「能諸江戸雀」ふ
「むづうや十筋右ん也ろ」とふ勺を載こまで百年の昔江戸ゆてもいひ
諺あくべ〜借りを教ふるふ右傷つとふ助語を用る例をちくいまで今女児の
ふ毓をは〜唄に。二ッ右りんとあンあ。とうふもたぐ二ッといくまで
ゆて右りんゆる何の意もあく十筋右傷つの右りんとおかぐ
貞享元年印本「西鶴二代男」ふ ゆるまろ六筋右傷つゆて」といふことを我
又「皮籠摺」元禄十三年印本
前勺略
二筋右傷つを味ふ曲こり 金毛
見ゆる十筋右傷つを粧ふくいろんとその幾をあくべ〜五と八とを
大数のことふいひ三と十とゆ小数ふ用ふると雅俗ふ用ふ〜

## 五 慳貪

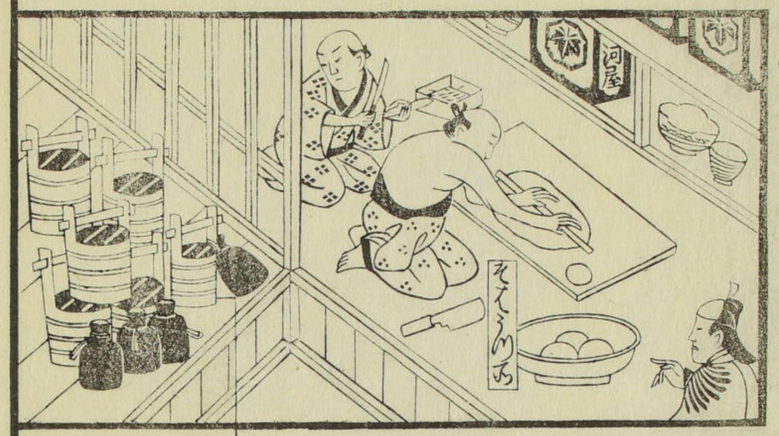
因果経とふ「和讃」ふ云「人のものさぐ。ゆ〜ぐるを。けんとふあり。人ふ物ぞ〜がる
ものさぐんとふぷけんぐちとふ。ものぐう」こふ説とふ孫大むふ法華経ふ月えくる

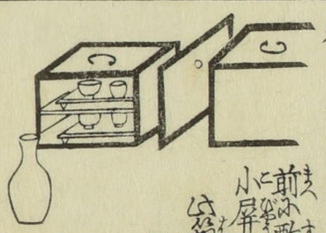
慳貪の意ふ當ちとぞ今の俗嗔恚の強ふのふる誤ゆて慳貪を恪こさまべ
蕎麦切ふもゆる飯ゆるゆる盛切て出〜かくりをけんどんといふあり
飯慳貪のこふ
むかく物語ふ曰「寛文辰年四年けんどん蕎麦切ふ初てゆこ賣喰
貴人ゆ食者ふ云」見けんどんの初ゆ寛文八年の法ゆ流れ出て集雑歌ふ

當世さやまきの

肥前本ぶ〜 やりがんふ 人ひるふ 源五兵衛 ―― 闕 けいのやや
きぬ紅ろり こ谷ろ 河傍いり 大明神 強金乃日糸や
古作ぞけふ ゆんまふ いつも絶せぬ 親母ま 三貫通ふ 弦賃る
八文ありのけんどんや 浅草町へ 鐘楼」以下江戸順礼の條ふ抄出
一時の戯文章ふ存て百五十余年の昔を月ろぐ「肥前節」のこと。又「酒飯論」ふ「
めんるゆの出せんざのびく〜ゆ〜てうどんけ
あることいや歌きり変とそなりろまとそてんどんさうゆぞ月えふろ」とあり 広重紙乃画

風とは云へども万治の比の物のやうに見えるれど前に
切とのゝ物出来とあるべ酒餅論も寛文中の印本
上に模さる酒
溫地樽
後年樽に
前に敵の看板を摸し寛文の比の
小屏風にけんどん屋と画たるさまの絵に
箱あり酒餅論の棚にあけるあり
箱の蓋をありて裏のさまの
見えざるもあり摸し出せり
今の製にかなるべず



俳諸芝看延宝年間印本
前々 津一万氏を賞す 似春
附々 けん菱麦やけん井の名 桃青
延宝中の吟多し上の図の棚に樽をすえるあるべし
江戸鹿子貞享四年印本
見酒屋 堺町市川屋中橋大ノ町相屋
同抱重 堺町市川屋。中橋大ノ町相屋
元禄二年の江戸鹿子にあれども
元禄出来町。

○抱重と江戸鹿子に云ふ一名を大□ 慳貪とも云ふ鹿悪ある薩摩とゝ〜ゝ青貝ゆいさら
粧ひ云へり正徳の比までも流行て天保の今に存好夏の人茶筅筒等に用ひて
人の知る所なるべ圖を摸さず

冠附天神花

きつゝと 冠 蛍のやうぶくろ 猶 作者不知
蕎麦の光やまた蛍ふり〜〜夕あり 當時は箱なれど
猶とのゝとあふ況ども〜〜

俳諸花あやめ 享保十四年印本 常陽撰
前々 たゞのまま 明 ゝ 紅 一ゝ 彩 長 水
附々 けんどんの 煙 畑 ハ 蕎て 秋 渋〜 雪 凍
青貝の蕎さるとの享保の比よりけんどんの抱重ハ絶たり

○蒸蕎麦切 かる口男 貞享元年頃印本 氣をたもつる 龍町 ちくさを 馬手もそそぐ 切屋
おなじひりわをや 砂さまちち一杯六文かけ 絲 迄むし〜そそぐ 切の根本とまつくふこそ
まれども云 下に知るまのことあり 浅草たゝ町あり とのゝ支云へ又 西鶴一代女 貞享三年印本 五の巻 蓮 女の
ことをいふ 條に 女ぐら 美食好 鶴屋の饅頭 川屋のむ〜そそぐ 小濱屋の茶酒

椀屋の蒲鉾樗木條の仕出毎當こまつ坂のことをいふ
弁当屋のこと下の日をそなへ
寺門ゆて能のりるとき中間一人弦師町あくりゆて蒸籠むしそぎ切一膳七文と
ようびるとき仕男後もも元るとびまづようびと入るとりたやく四膳まで喰ひけるゞ
やもでとんふ出蕎麦のあうふめうをうけかやうあう毒人ふてそせてもよ元ると同ふ

京都四條川原画巻

延寶天和頃の古画

亭主ゞ曰おりての看板ふむ〜そぞ切と書たけてう虫をありてえくるーうぞ山医者
ゐるゐ代物ハとるまでとゝふ他者のゐふそのぎゐゐ我らをび油虫ふゐゐハとて飯ゐと」
摘意修文とゐふ話あり貞享元禄の比ゐ蒸たるを奴る人多うしゐゐ今蕎麦
切を盛器ふ蒸籠を用ふる事ゐゐ此餘波江

○慳貪飯 江戸鹿子 貞享四年 食見頻。金龍山品川おびゐや貝殻かりぐゝ屋貝の名」
と並べ出せり 金龍山ハ浅草乳山之 又 玉花万葉記 元禄十年印本 京三條縄ゐ 茶屋慳貪弁当」とゐる
おゐ〜ゐゐて他処へ持ゐゐゐの名ゐゐ〜

花千句 延宝三年印本

前句 ゐゐ見えぬ一連 正立
附句 慳貪の弁当 ひゐく花乃 季吟

ゐゐ京師ゐての句あり 万葉記 及四條川原の画巻ふゐゐせ見ゐゐ 又 元禄曽我物語 元禄十五年印本
六の巻三若通ひの頃の事とゐふ條ふ「ちゐ九屋へとりゐひまゐとゐゐ
盃けんどんゐゐ茶のもけとゐる云」按ゐふ 江戸鹿子 ふ奈良茶屋と別ふ出せびけんどん屋と

奈良茶とハ異ゐゐれどけんどんとゐゐの流行てゐゐ事ゐゐその名を負世ゐゐ
吉原図鑑 正徳三年近松作 とゐふ浮瑠璃節ふ「少年切のけんどん酒」とゐるもけんどんの名を假て今
ゐふ居酒のことを戯まそ書るゐり○貞享の 江戸鹿子 ふ見頻の字を當ゐゐ見ゐゐふ頻く
調る意ゐゐ〜是却て附會の説ゐ延寶の草紙ゐ慳貪と書るゐゐ予ハ其説を取ま

江戸鮎〜鮓 延宝七年印本 言水撰

花ゐ ゐゐ ゐゐ ゐゐ 調吟
是も慳貪弁当の句ゐ 一代女 ふ辻出し〜弁当とゐるふ合て是れハ延宝中ゐゐ三都ふ流ゐゐ
○都風俗鑑 延宝九年印本 四條川原の少年の事をゐふ條ふ「すやゐふまゐ出せて話ゐの
ゐりて或ゐ大ゐとゐゐ陰摩と名付。慳貪野良とゐふ侍ゐゐり」とゐゐ事を載又 嬉遊
元禄年間印本 江戸作 ふ「よゐゐ大ゐ拾ゐゐ天神。ゐ屋。けんどん。ふ冠まを云」とありゐけんどん
とゐふハ端傾城ゐりゐゐ野良ふもゐと遊女ゐをゐゐ品のゐゐゐを慳貪とゐふ事彼
蕎麦切り移ゐて中昔までゐ遊里の地名ふもゐ〜ゐゐ或草紙ふけんどんの名拾女
ゐり起ゐそゐ蕎麦切ふ負せ〜と記〜ハ信ゐ〜。又 新歳御前帳 元禄十五年印本 熊谷女編笠 宝永

三年印本 等にけんぞん船との変わり新歳だ[illegible]ゆふふ食類を商ふ船のやうふ空え女編笠
ゆいふる遊女のことなせうふおのそる
再云衣食住の記 老人の筆記ふ享保の比温飩蕎麥切菓子屋へ餅へ船切ゆ〜てとろそう仕
其後麹町へうえ座あどうけんぞんや出来蕎麥切ゆでく紅がく塗の椀ふ入汁を佐利
ふ入て添きそる 柳亭云享保の比まで人ふ愛らま〜かぶきの女方あり京師乃
看板と出を云 此筆記ふ享保ふおふけんぞんや蕎〜ふりふへ誤あれど二八蕎麥切乃
ちでまるふさをのべ〜ふるき冊子ゆるるえず

## 六 玉川千之丞

玉川千之丞ハ美應の比より寛文の比まで人ふ愛らま〜かぶきの女方あり京師乃
座ゆて寛文元年江戸ふくだり高安通とふふ又河内がくと かぶき大ふ流行て同狂言
と三条せ〜とそ 野良虫 明暦年間印本 ふ曰 村山座 玉川ま〜ま面狂義云ぶくを難ぎき
ま〜ふ〜女より好このまをのふと立五中狂ふを おとるまで 年の齢廿日だろ比月を

ゆる如くふれが野良のをそひも今少ゆて一ふふを〜くゆる云 京師ふ立 うちの評書 剃野老 寛文
三年印本 勘三郎座 ふ河ふ〜ま。女うと古今無類ふり個ふ〜とやうさん小うまふ
ふ〜ぎて面白〜今ふあげくふぐふれども過行る月のかりもねとそ孫ふ〜ま
座紀ふとふ〜てう〜洛陽の昔ふりひ出ふまてふ〜ふどうふ人ふ〜実ふ野
道の元祖ふれが母の人ふりまてふ〜もさることふとそ伝ぐれ 江戸ふくだりて 江戸名所記 寛文二年
堺町の変とふ條ふ 比比野良虫とふふ書ふふをふまてとをぐの評をせり中畧
寛文元年粉の比條川系にて若氣かぶき女かぶきふわとをけぐ中畧邪のかぶき
崩まて浪人ふる大坂荘左衛門。小まひ広ふ。杵勘兵衛。又九郎。おどう千之丞と拉
ひ〜てふぐり発をふる云 と紀〜て西中ゆを中村勘三郎が芝居の看板ふ大ふ玉川
千之丞とふり見 寛文元年江戸ふくだり 証とをべ〜
野老歌仙 治良の名をたてゆる発句 知等独吟 古写本
前句 月影に立てを海をとふふの助 義田
附句 大事ふせんの〜ふ〜ま〜ま〜 玉河 東海の判のふり畧

按るに元寛文末のころ彼岸江戸ゆて愛られ〳〵刺の吟こ又古今役者物語
延宝六年印本に「さて又右を添た長つ女方の初として若衆かぶきの磯とあり長ふ長ぶ先
花の類ろもうて香のこまるに異ゆもぎさてそれよりも相続き流まもきよ紀ゆ門の
せんのぶうぎに主膳として野良若衆のあ上り三ゝ千之丞と先の上まといひろ
ろゝおの勺に仍さう主膳が事三編ゆ巳此冊子ゆ江戸の男級ゆて寛文延寶中迄とあ
かぶき狂言の繪本ありかのあこ巫ぶこまぶるせ〳〵とふる安ぐろひの図あり

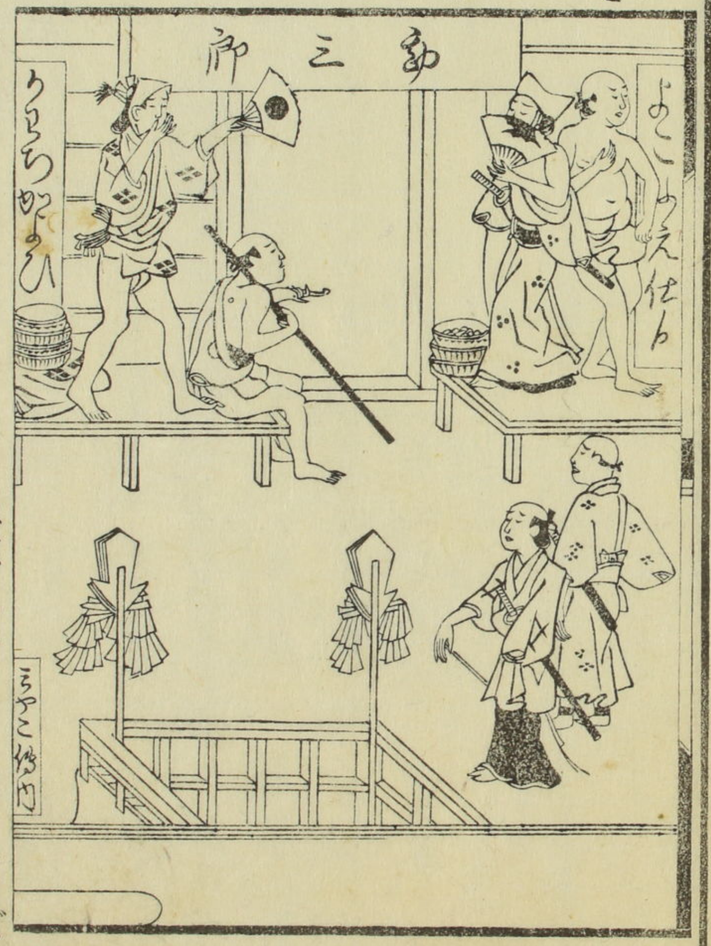
すれうた〳〵ゆ〳〵て出も

花洛六百勺延宝八年印本

裳勺 千之丞 友静
ワキ 萩武蔵 友吉
をゝ萩武蔵たゝ勺の方とうて玉川をきせる勺あり

剝野老に小又ゝろ堺町の圖

奥書 寛文弐壬寅天中蔓吉日 逸油町 ますや屋平板



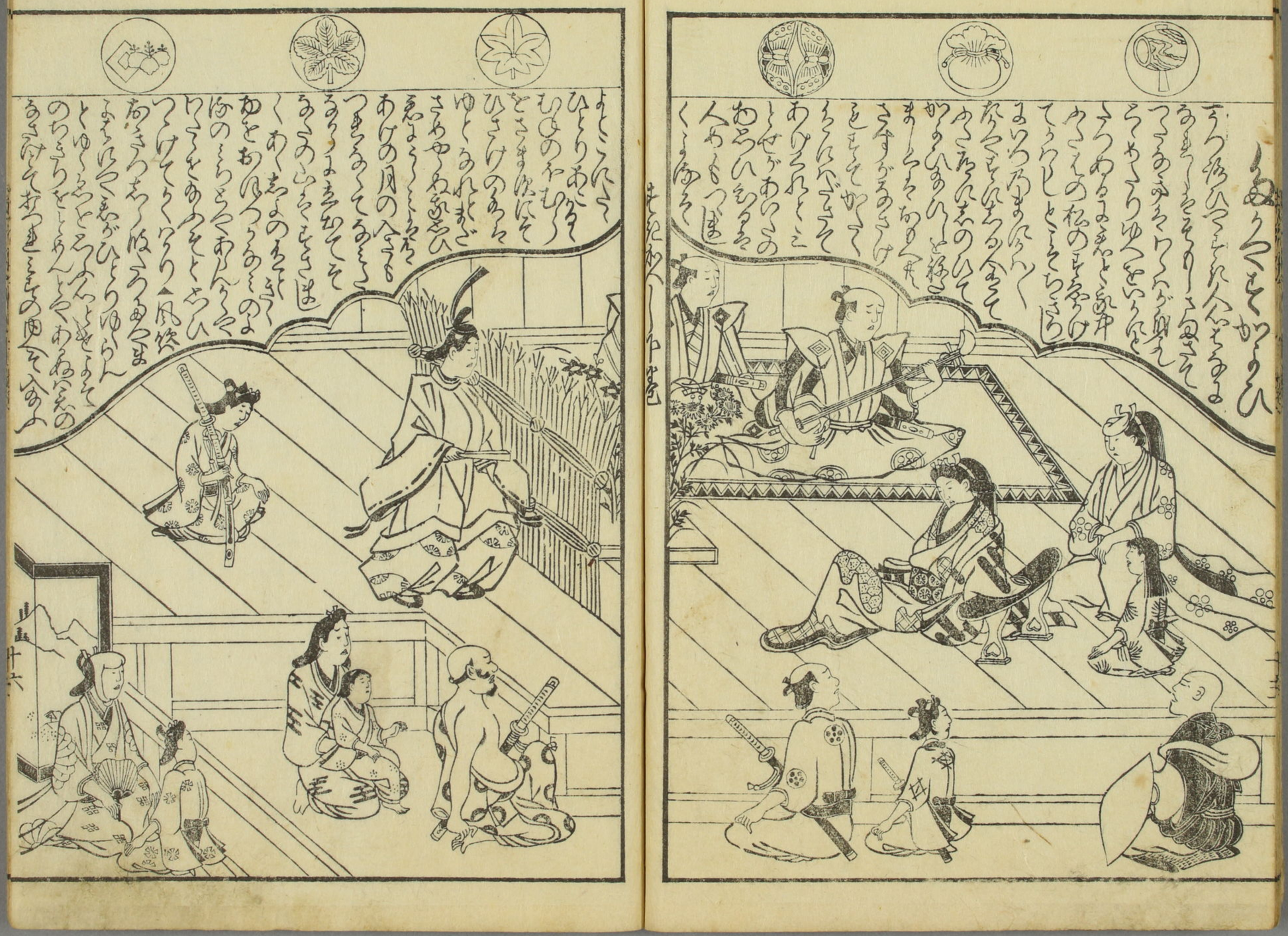

ちたかゝちぐゝひと
ゆゝふすかのち
ゝう妻がゝひあり
江戸ゆて
伝程云を
ゝゝせ〳〵とゆゝ
寛文二年より
四年ゆ
寛文五年ゆ
尾張へ
ゆきゝとたゆ
ゝゝゝう

尾陽戯場事始天明二年写本ゆ曰「寛文五年乙巳の秋橘町裏町ゆて狂云橘ゝの紙奥ゆ
ゝゝ、松本治兵衛ゝ。ゝ文、玉川千之丞、河内通ゆ久〳〵くゝ〳〵ゝ」とあり
元ゝゝちゝき冊子ゆれどゝ尾張の國のかぶきのことゆ巨細載ゝり

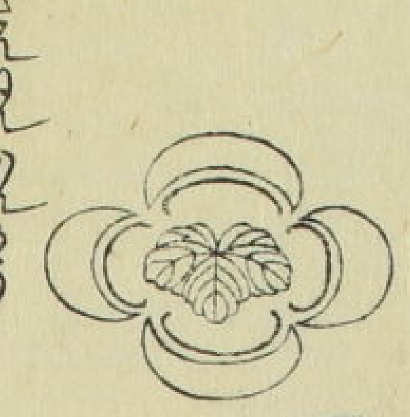
西鶴大鑑 貞享四年印本 五の巻ふ云「七条門のわろ小男のなを千三郎がむ〜。風俗が異
体なるまゝ用て洒ひ出して家様の所業とわけての面影実の女郎屋も何とゝて
見ゆるまゝ云ふべき十二の夏より十二の大尼まで振袖
なて一日も見ぬにめつきねとまの学の若女形まいまふわやうべ〜河内通ひの狂言
だろり三年が間江戸の人をあびつせ。狂ほめ草。野良虫。ふそ此の夏をめざゆま
ぬ云 野良虫おほえ草 又同作 日本永代蔵 元禄元年二の巻ふ「西門ゆ三千女方〜て河内
通ひの狂言一番を一日小判一両ふさぶめ一年三百六拾両づく取ぬ〜を侍勢へ引ぬ〜死る
ときふむ〜の舞臺衣裳も孫らぜ」見ぬの冊子ふ河内通とのふが則高安通ゑ
借友吉が匂ふ多かかぎらてと附西鶴ハ高ら声と書されば恭ゝ死とのふゆる
わゝ郡ど小唄のよるゆてあま〜あびまてて摸〜画の標注ふ見えるぶ彼河内色
の唱歌あり又 好色一代男 ゆのふ「六千ゆ三千ゆ三千の未延宝のまゝ寛文 祢宜町狂言屋ふ多
門庭たゝつやぐらふ出来落小ざゝ」荒井才三郎 王村吉郎 玉川千三郎 玉川内記 玉川



主腦ふを笑ふを称宜町ゆてかゝをあさ男拍子をての表ゝ元共ふあり見物
客ふ合て加賀節とのふ歌をうゝひ出せ」とのふ夏あり出る安通ひの小唄ハかの
加賀節ゆてうゝ〜ぶ 加賀節の事 俳諧古道具 ゆふ
又案ぜるふ 吉原讃朝記 寛文七年印本 さぶよとのふる花女を評して「玉川千三郎ふ他ゝ方と
いゝどゝ出ぬも心を注けて見るふ千三郎ふ他ゝ方とのふ
今の千三郎ゆ多ふ似ぬ出ふ多ふ郎ふ他ゝ方ゝ勝て他ゝ方ゝ〜と答て曰
ゝをのふるれど寛文七年の比ハ千之丞ゞ世義〜証とゝ」○さてゝ三郎ふ没年ゝ
俳諧武蔵曲 千春撰 季吟序
前句 ゝ多見 義 吉 千〜〜丞。
附句 徒ケバ 松 朱 戻レバ 地獄よ 洞 秋風 一晶
見天和二年の印本ゝ多ふ此吟ゆる吉野ハ花女の貞享元年印本
野良三座記ふ玉河千三郎を評して」ゆゝまゝてゝの人ふせバ一ツゝとゝの名人ふらん
さゝとゝ狂どのゆゝゆまゝとゝふ人ゝけゆゆ」とゆまゞおの千三郎ハ天和中ふ没さるなるべ



右にうつしまいらする物は、ふるき冊子のおくに見ゆるその役
者むかしは名のある大夫をかしこえらびを記し置ぬるき
見よきかしうれる延里佐太乃ともものとれらつをうを
見るれおひくも今眼前にうつりて振舞をみるれ
あれ何ぞさかんなりけんやみえ侍るし
延宝六年 清明日　通油町本問屋開板



役者物語の奥書おのどし延寶六年より今文政八年にいたりて百四十八年の昔なり公さるしハまへにもいらぶく寛文のすゞめより延宝にいたるかぶき狂言をそれぞれとりあつめ菱川師宣が画るものなり

野良虫 剃野良の二本とも千之丞の役ハ本ノに著あり
野良虫にも蔦のしべを出す

俳諧雑巾 延宝九年印本 常矩撰
わかとんわのじ松まつ川わか居 貞之
此句も千之丞主膳がことを載たり因にあつれ載た

○近年刊行なし冊子に天和元年千之丞なき帽子をかぶりしことを載たれどふるき
さうしにて見るはまだ見出でず又 舞曲扇林 にも千之丞の事ハ見えず猶かぶきしやゆてありしと見えたり

七 柴垣

明暦の流盛にあたりてあかりし柴垣といふ小唄あり是をうたふものにはわかき二人り立
ならんで手を拍胸をうちて踊るなかに柴垣をうたひしとも云ひ 或古記 明暦二年の條に
「このごろちくあらく此頃北國下部の米搗唄とかいへるに柴垣といふを流布して河原者の業とする
」歴歴の會合にも強て翫ぶ酒宴遊興の座の見物のうちに柴垣といふ唄を
うたふに拍子をとり形をむくはけき田舎夷が薇縄をもって口を綴られたる如くに作髭」
座席へまかり出て蓬膚を脱戴きえもいはぬ転して肩を打胸をたたき癲癇やむ
人の狂ずる形勢にて右様左様に覆す息も継敢ずわづかに俯仰に音を助け手を
あはして興ず」云々 又「舞正語磨」万治元年印本 に「まづわしくてみえける踏撥にハ図ざさをふる
柴がきをうたふ事をいやしき気云ぶりの頂上なれどもたちまちわすれて大方ころさき者の人
なされ是をまげず」とあるにて明暦の頃流行しを見るべし「東海道名所記」万治年間印本 歌比丘
尼の事をいへる條に「比ごろに柴垣とかいふ原ハ山のおく奴どもの踊歌なるを比丘尼節に

のせてうたふ」といへば、あら賤き者のうたひし小唄にてありしなるべし

糸竹初心集 寛文四年印本

しばがき〳〵 しば垣ごしに 雪のふり袖ちらりと見た ふり袖ちらりと見た

柳亭云このちんさんざくの替唱歌あまたあり、そが初へ此歌あるもありなべて柴垣とあり

卜養狂歌集

ある人奴しば垣をうたふを絵にかきて歌よみてとありければ

やつこ〳〵の名もさながら柴垣をゆひそへてまでうたふかのこゑや

按に明暦三年の古記に見えし寛永の頃より伝へし小唄にもさら〳〵柴垣と云ふうたひはやりしと見えたり

同書

ある人のもとへ行けるに主のかへるを待てゐたりける人の馳走にいづくよりかきたりし鉢の具を見せんとの給ふ程にまことに大小さしたる人むくつけたるやうにてすわり、さんざめくやうの人ぞ柴垣をうたひけるをやよくもあらんと主人も興じければ

天下一の拍子にあはせてうたひし

按に明暦の古記に「柴垣」なるものありと見え、一代男にも柴垣踊をうちて云々とあり

柴垣をうたふの辺のうたひ歌やよめる ひとつふたつ拍子



同書

ある人の方へ行けるに芝の蛎を料理して胡椒をふりて出しければ

小鳥あまたむらかるよき芝がきの歌をうたふありさま胡椒ふりちらりと見えたる

異本卜養狂歌集 延宝中写本

小鳥ぶしでうちぞ高くむるゝ芝の蛎柴垣ぶしにちらりと見えたる

柳亭曰此歌寛文十一年十月十六日の作なりと巻中にありおのづから柴垣ぶしの古記にいふところとあはせてそのさまを知るべし 柴垣の二ツは初心集の小唄にあはせて見るべし

俳諧江戸廣小路 延宝六年印本

前句 腕を拍いて志賀乃山風

附句 柴垣や大津うち出の湊よりも 卜尺

柳亭曰狗をたくくしたるに柴垣と附たり

吉原つれ〳〵草失墜 延宝二年印本 竹本氏蔵書

の娟をあつかへこそ色このむところのはじめ 以下注

あそびにつゞき夜をひとりあかし、ことわざにいふをこのひとつにいふこそあれば、またしも一坊のけぶりしば垣集の中に

あきれみ見ゆる橋坊けぶりうちつれ中より舩とうたひしことぞ

とあれば延宝よりおよそ此替唱歌を綴りて柴垣集といふ草紙のありしなるべし

西鶴が一代男 天和二年 に越後寺泊のことをいふ條に「ころごろなぎさ此所は上方よりざんと中も小歌が

時花きさり寛元の差流い絲く秘書のいせどを表がそろいねとをうし侍る
さそをを安をを慶れとを今ゆひ合を紫垣踊へをりてうとる々るゆ多ゆも知らぬ
とゆを何をいうてをもをぢやのの云と又三千風ゆ行脚文集一の巻加州金澤の
文ゆ燕樂の加賀節も付ゆをりので悲哀の紫垣早歌を遠く慶をて吟人
をのにゆ〜」をを天和三年より書る文あり一代男ゆ合考ゆをの小頃をや
天和の比慶ま〜こと必せり

俳諧夕兄爺元禄七年印本其角撰
前々略 発句 恒うけをを乃 磯 羽 神叔

獨鈷鎌論宝永中印本 圖水著ゆ「比丹前の拍神ちうと紫垣をうえをを時をゆらを
とやいをえ」百年の昔をいゆく慶うこと見多の冊子を月をを知るべ〜
因云ひそめ草正保元年著 同二年刻 ゆ琴のことをいふ條ゆ「いをぞの比より筑紫樂と
いふことゆをてひきるそれより陸ひてゆひさの奥に小ゆゆどの世侍る中畧

筑紫ゆうゆをを樂おるをのをまやさび少〜ふゆう〜うえんゆ小ゆのをろをを
をどりゆどのをにをひえをまをれば琴のをををやすををたるゆうゆあんゆり
々る云に」と月をえをゆゆ引用せ〜舞正語磨万治ゆ「岡ざ見を踊」とゆをびゆるくを
岡崎も踊唄ゆをゆま〜ゆべ〜○友人の日今の踊ゆゆ六拍子とゆゆ見
則見ゆびゆう〜ゆり予按ずるゆ岡勝ゆ見拍子を要とを〜紫垣ゆる拍子
要とをる紅故ゆ踊とゆひ拍とをいゆゆべ〜 岡崎ハ正保のさゆ孔めをえれば寛永
前の拍ゆ 前の小唄ゆをを〜紫垣ゆ明暦
月をえず

## 八 江戸酸漿

寛文二年印本 四の巻「七月七日東西本願寺の花。東西とをゆ對面所の
案内者中川喜雲著 簪ゆををる造物籠ゆさを。拮梗ゆをを〜。男郎花。仏公羽花。蓮花。荷紫。百合
花。をゆをを。百日紅花。杉の葉。莎荷。射干草。をををををを。年ゆ紅花
みを鳥獣を作りゆを侍るを江戸酸漿子とて七月ゆ色のゆ花をりとゆ出

しておき緑色の物とせ」といふ事あり寛文の初めにきまりとなれば此江戸にはきたえ
万治のころよりありし物ならん【俳諧毛吹草】寛永十五年撰の季寄八月の條に「鬼灯 赤鬼灯を記あり」
とあり【案内者】にいふそのころを見れば七月に色ばく鬼灯も万治前へありしなるべし

【江戸新道】延宝六年印本 言水撰
里乃子やすゝしに吹らん江戸鬼灯　心色
柳亭云此句【江戸廣小路】ゆゝ上の五文字。いろある風とあり

【洛陽集】延宝八年印本 自悦撰
口紅乃かひやならん江戸鬼灯　琴風
江戸ほゝづきのこのうはうしきゆゑに口紅をさしたるやうなるなどとも

【空林風葉】天和三年印本 自悦撰
女奴江戸鬼灯や色おのこ　山川
洛陽集 空林風葉の二本とも京師の俳書なり　好問堂蔵

いま丹波鬼灯の名をいひて江戸鬼灯の名をいはず今六月より色ばき
たる鬼灯あるは是則江戸鬼灯なり又はやり江戸鬼灯とも絶て丹波の国の緑

をかしみありて極まるとも知らず

【九】稲荷岡 附 小砂とり

【松の葉】に載る「月見」といふ小唄に「歩行でやれ志やりよせを通りしまちのべ
小石取池
ざりとるいけのみかゞえかへらるるさいふちもやさしく茲にやせくろぞちや
異姿　片枝枯　皂莢　其方
いやながさ稲荷の岡にあるいわまどゝも君をおもへべくノウ。手編笠どての松原された
ゆゑの云」柳亭云かし編笠をかぶりおのれが顔をかくしゆくをいふ笠又は編笠を云ふ　とあり按ずるに菱川の絵本及古図
画巻などを見るに古来通ひの者みな弘願山専称院なり道哲のうへの土手につるぎ弘願山乃
裏に合力稲荷の社ありそのうへなるゆゑに稲荷の岡といひしなるべし　松の葉は元禄十六年の印本なり

【續誰が家】宝永七年印本 百里撰
前句　ふじ見る着の糸を嗅ぬなり　拾翠
附句　軒白紀稲荷の岡に銅壺涌　済通
○銅壺涌と云泥町の茶屋のさまをいひ煙の立のぼる風情を軒白紀と
はくり此句のあるべし

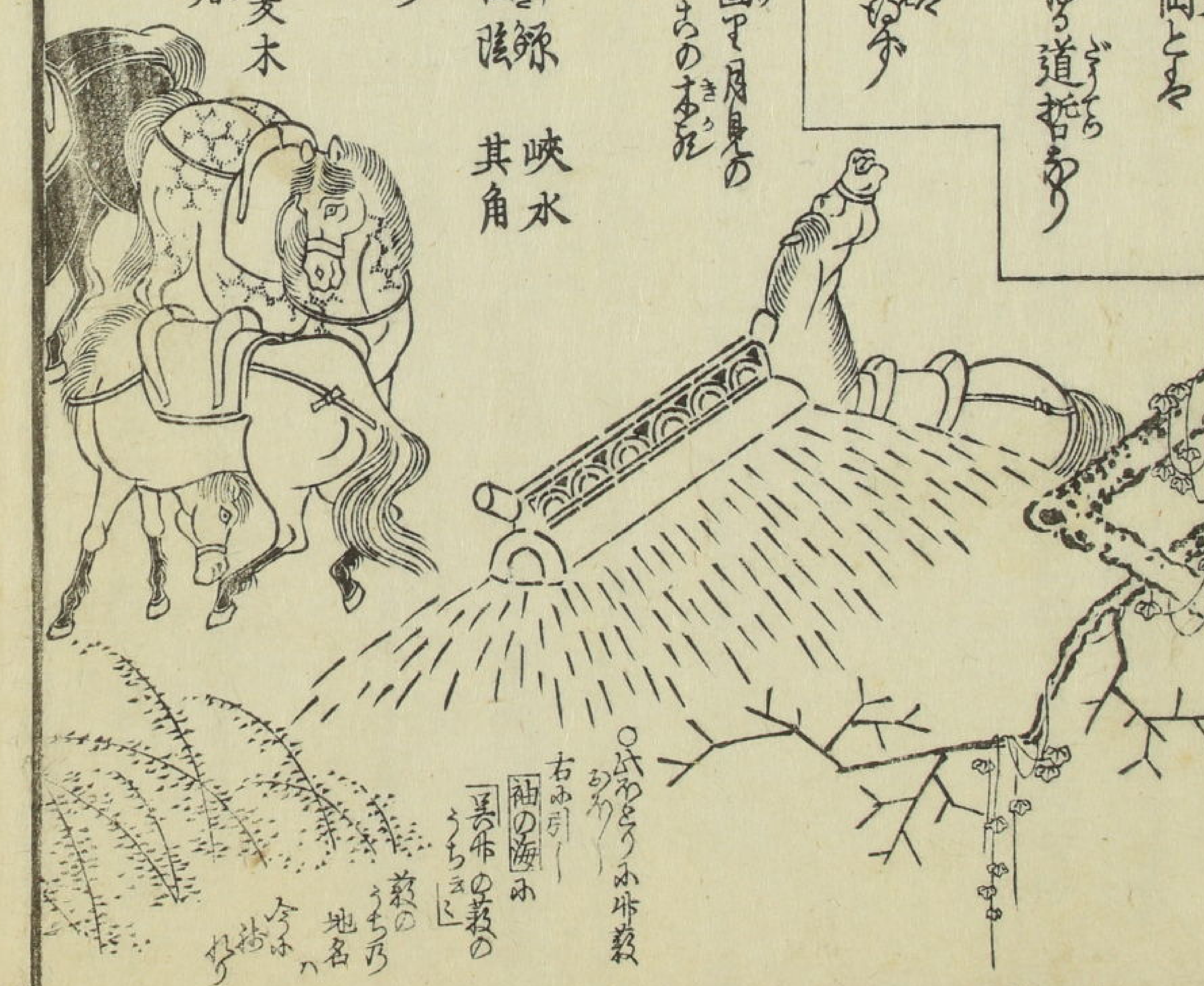
菱川の繪本 [道引] 延宝六年印本 に「金龍山待乳山あたてるとうおるてゆうををあ」
えんおどけろひ公せろく処あり」又 [松の葉] の「富士まうで」とかふ小唄に「かの
をたかをて仏ふあるべき。たるものごうてひをを氣のとろく俳ぢやをものこ仏ぢやわをを
ひをこんちやがろひのゆ助が弱をまるををのくうやをうあんだうわふうや
おそ毎をさってたるのきいよあをんべだらやをとびおうをて。ををうを所ひで
都うちかく〜」とあり [江戸名所記] 寛文二年印本 に大門までるゆてうふ画わりをの
ろふをを土手を馬ゆそ打さまを画きろをを又れどおろくを此稲荷の岡といひ
をの孫ゆそろをうかま〜と是等の冊子ふ合て考ふべ〜 又吉原ようがる者を
次ふ摸〜出く古画ふ 其角の句を合せるべ [誰袖の海] 宝永元年印本 ふ「日本堤の呼次番屋さ大くをふ星わど
めりて往来と送る拍子木の音をを衣籠にかをひくるを仏の溝ふ吳服の藪の
うち道鉄の寺のおふはおぎとゆくるから売りの数籠おき時ろうを見おとり
ぬきで浅をせ衣戀の重荷をのせておをに来るを馬ゲの孫も勇ぞう」云 の作者を

由之軒とのひて京の人ゆり元禄年間ふ江戸へ 元禄の所を芭蕉ゆそかうの者おをくかう尾る
来り家へ帰ゆそのちふちの草紙を印行も
のおどろく〜ゆを芭蕉絵おきとををろうを見おとろとふ書るあべ〜 道哲のおふ彫ゆる
とふをと前ふ引〜冊子ふ合す
○おふ引〜小唄「月見」ゆ「小破ゆをろ池のあがゆ」とのひ又 [裏甲] 宝永五年印本 ふ「砂利
取池ふ若の田面おゆ先ゆて衣紋坂を下大門へ入る」とありいまの砂利場ハ
小砂とり場ゆり中ゆて仏をとをを今ふ小石多〜寶永の所までを小砂をを
〜わこの池のどくゆてゆを〜あべ〜

[俳諧其柱] 其角十七回忌追善 享保八年印本 貞佐撰

前々 [illegible] 四万六千ゆちくをき 蓮之
附々 砂利 拾て 今乃一婆婆 貞佐

享保の世を砂利とり場いまのどく繁花の地とあり」ゆを仏々をまうけあえ
いま彼地の何素ゲ座ふ池ゆを是小破をとをを〜跡のかをどろ残ア〜ありとぞ




天和の法乃画巻に此圖あり稲荷の図とて
此とまの後をいのしあるべし
下にかんゑさるゝ專稱院いはゆる道哲なり

盆の額をかけてり
紙中せまくて委くえかゝず

○大磯に赤羅のまとひしとまの後を画て月見の小袖にかく絵かきてる皇英といふもの本説

武藏曲 天和二年印本 千春撰

前 はぎ寿耳に持るよし鄰 峡水

附 此おころもてるや込らん接陰 其角

とわるも此処をいふあるべし いまも桜の古木あり

芝肴 延宝年間印本 似春撰

前 から尻を若殿やされたる稚に 夏木

附 たのもわげ盃を本陣の月 似春

又 霧ふれて見日かゞやく幕をうつせ 夏木

○此あとりに非萩あり 右に引し 袖の海に 「其中の萩のうちに」 萩のうち乃地名今はなし

同書漢和

「如何さんにすその洪 似春

「軽殿ハ戀先陣 静軒

「よしや旅たゞいハ川へ それまるとえ 似春

心のなるゝ土手に揚 仝

水比羅目 元禄十一年印本

遊女の人に物いふ 結ひ杜撰 綿の弦を たゞかん牽きなるるとりござんひや 音にたち牽続け 艶士

空林風葉 天和三年印本 自悦撰

七夕

牛男に浴をあせたり 今宵川 素雲

星の年を 立待ちひの なにかしるる あるべし

見聞詩林 元禄十七年写本

吉原八景之一

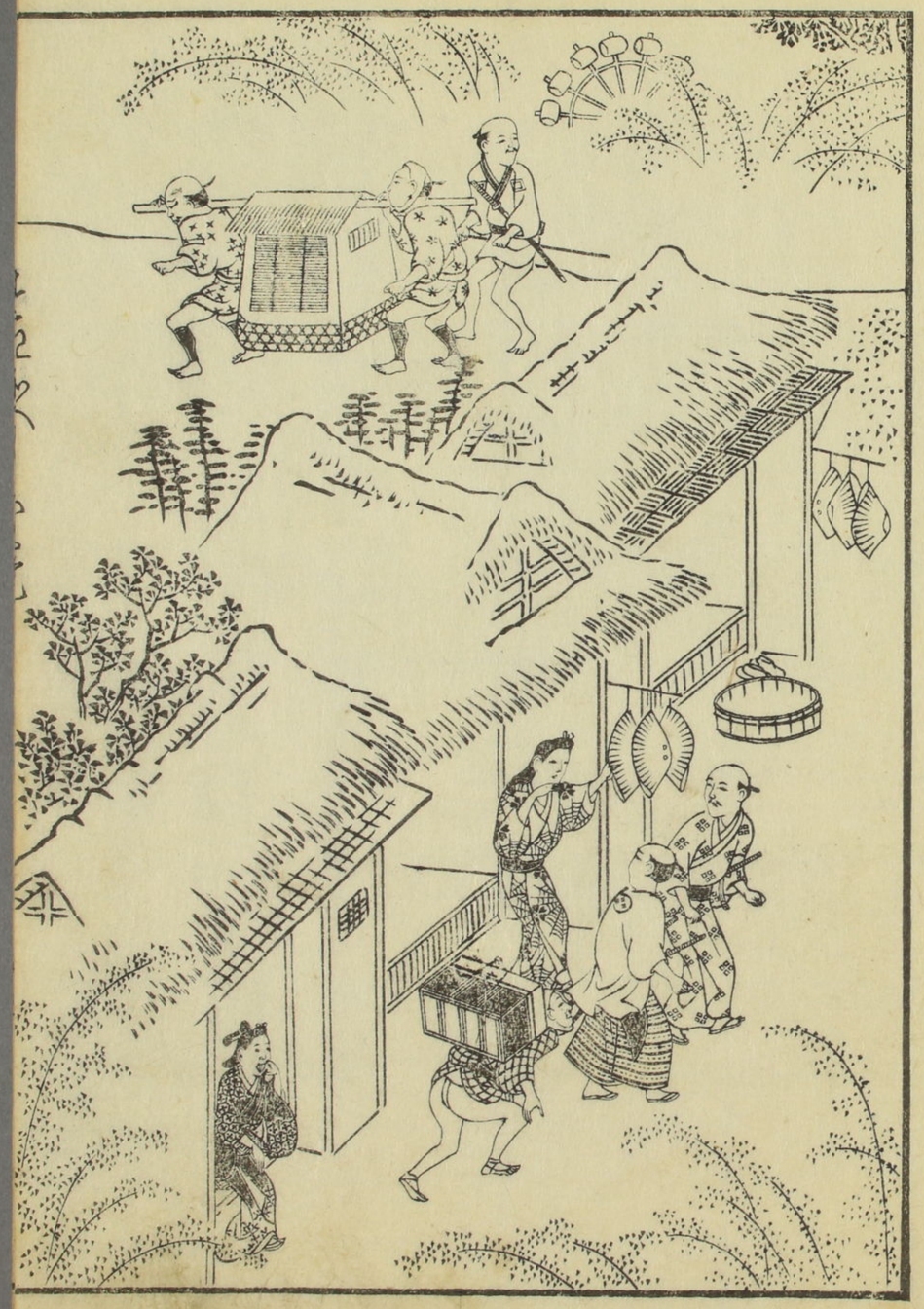
道哲晩鐘

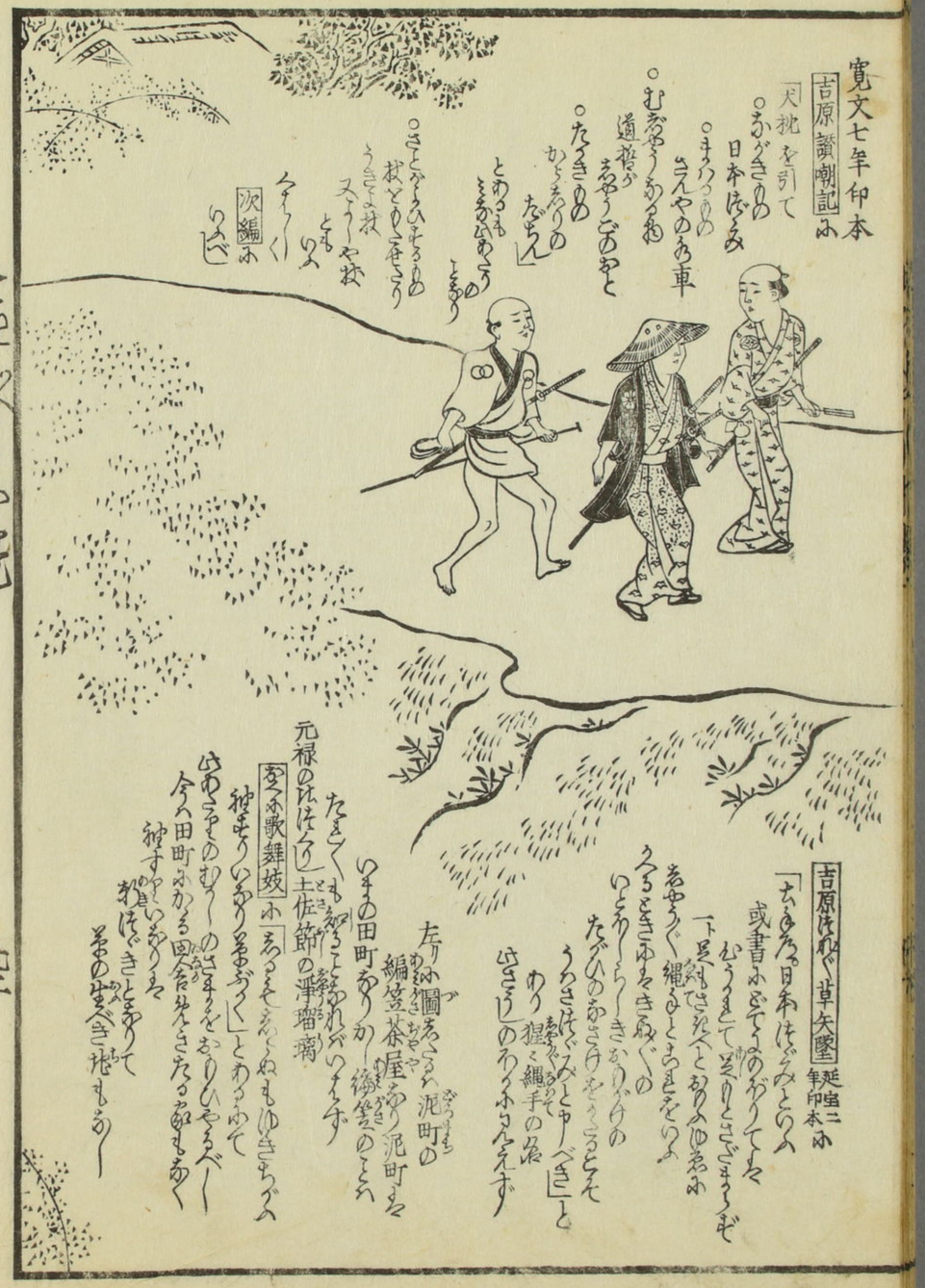
泥湖二挺櫓行遅

相共忍人姿怛悵

坂至衣紋心懐々

情亡道哲撞申時





寛文七年印本
吉原讃嘲記ハ
「天枕」を引て
○おぐきの日本ばなし
○まつのつゆ
さえやのあ車
○むかうのあ
道哲が
○たくきの
かつまつりの
たぢん」
とあるも
○さとぶりひまるの
ぢとも
うきよ枝
又うや枝
次編ハ
のびし

吉原はなぐ草矢壓 延宝二年印本ハ
「たゆたふ日本はなぐみとの人
或書ハぶてのがりてを
ひうまとて
下見もさえとあるのゆ
ゆうぐ縄ひとらまをいつ
うるときゆるきあぐの
いとりーらーきなりぐの
たぐひのあさけをうるとて
うちさけぐみとゆーべき」と
ゆり 猩く縄手の品
ひさり」のろくふうえず
左りハ圖ろくるく泥町の
編笠茶屋ゆり泥町を
いまの田町ゆりーか〜後笠のこと
たきく
元禄のはたけ」土佐節の淨瑠璃
ハ「ろくそ
神ぢりいのり
ひゆ
今の田町ハかるる回合ゆ
神すゆ
ぢきとまりて
ぢはぐきとまりて
ぢの
ぢき地

○古き屏風の
ひやうぶ
ふるき
惜べし年号を
をしむべし
開これども
ひらけども
見とひとくふ
みとがめず
押さる反古に
おさるほご
延寶天和貞享
えんぽうてんわじょうきょう
當時の
とうじの
○三社権現の祭礼を
さんしゃごんげんのさいれい
俗ふ親者まつりと
ぞくにおやしゃまつり
いふ故ふもの俗ふ
ゆえにものぞく
ちがひて
如此ある世
かくのごとくあるよ

十 浅草三社祭の番附

○母衣武者ふ
ほろむしゃに
神事のふるまひ
しんじのふるまひ
傘ふ
かさに
扇
おうぎ
和巾
わきん
前に摸し
まえにもし
鎗の画の
やりのえの
傘ふ鎗をさげ
かさにやりをさげ
ものの類
もの
賢暦十一年印本
けんれきじゅういちねんいんぼん
花當談ふ神事のさま
はなのはなしにふしんじのさま
町家の紙張日傘ふ
まちやのかみはりひがさに
徒園まつり徒組
とえんまつりとくみ
又浮世袋とふ
また
ふうせいぶくろ
ふ
又安永八年印本
また
前ふ附自在裏
ぜんにふつけ
傘ふ
かさに
ふるまひ
とのふタを戴きて
たるまつくまで
ゆまつ
ゆべし

松蘿館藏

［十一］煙草の一服一銭

むかし煙草を一服一銭にて売しことあり［八水随筆］に云「煙草の始まりし頃いろいろの書にさまざまに記して定かならず予が父弱年の比大坂高麗橋にて唐人の装束したる商人竹のきせるにて一服一銭ほどにて人にのませたるよし必ず謬りぬ」此話はいとめづらしきその書の作者姓名も詳ならざれど江戸の士にて享保元文中を経たる人と巻中に見えたりその父の弱年の比といふは承応明暦の始めにやあらん

還魂紙料下之巻　畢

此書稿を脱したるは文政甲申の春なり今刻なりて再考するに説もらし引そこなひたる事いと多し其一二を左に録す

［上巻］　五　安阿弥の條

安阿弥にかぎらず古き仏匠の名をかりて少年の艶郭に名を入しことあり［江戸咄］に運慶湛慶の名あることは既にあまた載たり　元禄六年印本［雨夜］［三盃機嫌］に上村吉弥といふかぶき治郎を野せし條に「上作定朝平湛慶」村々町々開帳盛なりとはかり定朝は後一条院の御宇の仏師なり江戸坂本に大夫小任せし人大夫形と号すと［人倫訓蒙図彙］にあり

（十二）雛の賂の條

［柳樽五編］明和七年印本　川柳点

賂でゆけるが嫁気まゐらず

○雛の挑かき紙雛の襟にとたらかせありつる句なり

㊀ 梵天國の條

當世男 延寶四年印本 蝶々子撰

前 焼町肥前屋にて 宗因

井の末一限やうの紀年

福神通夜物語 元禄十四年印本 不角撰

前 蕨やの乃初先の一限目 倫角

○末一限を猪ぐ〜る勾あるべ〜

寶永三年許六が撰〜 十三歌仙 ふ「麦一限よ秋を書きる」とある魚路が句

あり何にもあるべきの一段ぢやあどそのあ跡も書のふ猪後あり是末一限

といひ〜より猪ぐて至原を浮後瑞よりいで〜 刈あるべ〜

下巻 ㊀ 七夕踊の條

玉海集 明暦二年印本

前 絶たくや織姫たやるべ〜

付 猴をせんりかくるをどりま

○第とふふるよ猴とはたりあるいふ和と合せるべ〜



後様姿 天和二年印本 言水独吟

前 糸蓆ふ鬼灯さらも陰るふ

付 雲を敷の きをたゆる雲

去れ勾よ蓑とふふ勾をはきそりかくいひをふちて秋の勾ふあ〜くを

ふて雲を敷をい後の多を敷ふる紙ふるべ〜 言水をひさ〜く江戸ふあり

此句上系ふ〜ての猪ぬと

㊃ 十四五の條

續山の井 寛文七年印本 季吟撰

前 ぬけて力を蓑わどもあ

付 かう餐の十五夜のつぐまみ お猴 可全

㊄ 紫垣の條

家の杖 寶暦三年印本

前 鼠ふ遠寄乃後の歩形猪 青李

付 紫垣うちし〜若荒なりり 七十翁 草叟

㊅ 江戸殘猴の條

延寶四年梅盛ゞ咲〳〵 類船集 ハ「ム菊菰。むく〳〵ようわ[illegible]」

江戸後期のとそ美〳〵くもゆきのりまるわくはきの付かゆたやゆしをれバのてまや

もうのとそ月後ようゆるまる後期ハ吹嶽さまねべ〳〵考てよりゆ孫ゑ[illegible]

三三かまびあゆをゆふどくい後ようゆ色ばくまる江戸鬼灯ゆて丹波乃

極ゆるゆるべ〳〵

# 江戸　柳亭主人種彦著

淨書　千形仲道
剛人　朝倉吉次郎

柳亭主人著近刻書目録

○還魂紙料二編　二冊

○奴姿元結　三冊　俗とかく古きことどもを記しこの作者

○俳諧古道具　初編三冊　八冊ゆふ[illegible]のゆるまで俳名のうちより人名[illegible]

文政九年丙戌冬十二月發行

京都書林　堀川通佛光寺下ル町　植村藤右衛門
大坂書林　心齋橋筋唐物町　河内屋太助
江戸書林　通油町　鶴屋喜右衛門
馬喰町貳丁目　西村屋與八

山路蔵

美艶仙女香　江戸後期の美人画を多く描く町絵師　坂本氏製　中ごろに白くしぼりそめたものたくさんあるなかに人を教ゆるほど年かゝりてそのうつりとなるまでのうつりとを考へずに出すと教のうつりとなるゆまさわりとなるべし　しかるに別稿の為にはあれば人〳〵のもちひまるひてのちその功のすくやうあるを知たまへべし

彩雨亭庵九賀